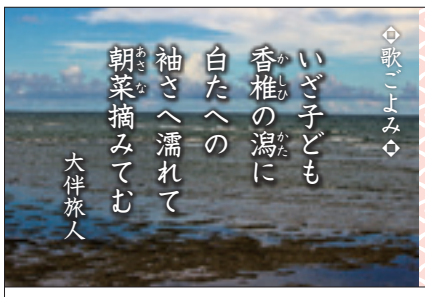


◇歌ごよみ◇

いざ子ども
香椎の潟に
白たへの
袖さへ濡れて
朝菜摘みてむ

大伴旅人

皇學館

学園報 第59号
発行・編集／学校法人皇學館 企画部
TEL：0596-22-6496・8600

●大　学　大学院・専攻科・文学部・教育学部・現代日本社会学部
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704
TEL：0596-22-0201（代表）　FAX：0596-27-1704

●高等学校・中学校　三重県伊勢市楠部町138
［高 校］〒516-8577　TEL：0596-22-0205（代表）
［中 学］〒516-8588　TEL：0596-23-1398（代表）

■注目記事

2面
平成27年度 卒業予定者 就職状況中間報告
3面
渡邊君（皇中2年）の作品が
バスラッピングコンテストで最優秀賞
4・5面
学園祭レポート ハーモニー響いた学園祭
7面
中高生徒が清掃ボランティア
8面
英国・ケント大学 夏期英語研修報告

■連載

2面
皇學館人物列伝㉖ 曽野勝巳
8面
皇學館ミュージアム 役者絵 市川団蔵
（髙師直　大星由良之助）

COC事業・活動報告

CLL活動が活発化

七プロジェクトが進行中

文部科学省 地（知）の拠点

COC事業（地（知）の拠点整備事業）の一環として、伊勢志摩圏域の三市五町をフィールドに本学学生が圏域の課題に取り組むCLL（コミュニティー・ラーニング・ラボ）活動が着々と進んでいる。平成二十七年度は七つのプロジェクトが立ち上げられた。

CLL（コミュニティー・ラーニング・ラボ）とは、伊勢志摩圏域（三市五町）に置く活動拠点。ここで少子高齢化や若者人口の減少など圏域が抱えるさまざまな課題に本学の学生が取り組む。地域住民をはじめ企業、行政など世代や立場の違いを超えた人々との交流を通じて学生は視野を広げ、同時に地域に対する思いや課題への危機感を共有し、当事者意識を養っていく。また、課題解決に必要な企画力、マネジメント力、情報発信などのスキルも修得できる。

今年度は、音楽を中心に玉城町を元気にする「玉城ミュージックモンスターフェスティバル」や志摩市里海推進室が中心となって取り組んでいる「MOTANI屋」など七つのプロジェクト（別表参照）が立ち上げられ、計四十五名の学生が参画。その一人、皇學館学生フューチャーセンター「皇學館みらい対話団」に所属している教育学科四年の武村志緒里さんは「伊勢市の公共交通機関が赤字であることを初めて知った。まずは現状を学び、主体的な行動とフレッシュな発想で改善点を探り、地域に貢献できたら」と意気込む。

学生がこれらの活動を行うに際し本学では説明会を開催し、教育開発センターの地域課題学修支援室を中心に全学的な教育支援を行っている。今後は圏域の各市町担当者と本学の教員、学生とで定住自立に向けたアイデア創出ワークショップを実施することなども計画している。

また、このCLL活動を基盤に平成二十六年度以降入学生においては「プロジェクト研究Ⅰ・Ⅱ」で平成三十年度以降正課として課題解決に取り組むことを予定しており、地域社会の期待に全力で応えていく。

圏域の行政担当者と協力して解決策を探る学生たち

CLL（コミュニティー・ラーニング・ラボ）活動

❶伊勢市　上水道新規啓発冊子作成　3名
身近な公的サービスである「水道」を受益者（市民）によりわかりやすく理解してもらうためのツールの一つとして伊勢市上下水道部と一緒に新たに社会人向けの啓発冊子を作成する。その作成スタッフの一員として活動。

❷伊勢鳥羽志摩観光連絡協議会　伊勢鳥羽志摩観光PRポスター作成事業　9名
若者をターゲットとした観光PRポスターの作成に取り組む活動。各市町、関連部署、組織の若手職員と一緒にポスターのコンセプト、デザイン、撮影について学生目線での意見やアイデアを出し合う。

❸志摩市　新しい里海創生によるまちづくり　次世代協働プロジェクト事業「MOTANI屋」　1名
志摩市里海推進室が中心となって取り組む活動。「新しい里海創生によるまちづくり」をテーマに地元の高校生や住民と本学学生が月二回のペースで集まり、地域の課題とその解決策を探る。

❹玉城町「TMMF」　玉城ミュージックモンスターフェスティバル　4名
今年で三回目を迎えるTMMF。音楽を中心に地域を元気にしようと、町職員をはじめ地元企業、住民有志が実行委員会を立ち上げた。今年も音楽ライブや玉城物産展、体験型ワークショップ、婚活パーティなどを開催。学生と「玉城らしさ」を模索。

❺伊勢志摩国立公園指定七十周年事業実行委員会・学生部会「あばばい」　10名
来年十一月に指定七十周年を迎える伊勢志摩国立公園の価値や重要性について考え、次世代に引き継いでいく役割を担うべく設置。関連イベントの運営や企画を担当。

❻明和町　観光パンフレット作成事業　14名
明和町が文化観光まちづくりの一環として作成するパンフレットの企画、編集に参画。町内の歴史文化観光資源をわかりやすく紹介することを目的に活動する。実施主体は岡田登ゼミで、学びと関連づけているところに特色がある。

❼皇學館みらい対話団　4名
地域課題を題材に、多様な人たちが未来について対話する場を創る活動。学生は地域課題や対話から知的柔軟性を紡ぐ方法を学ぶ。自主開催フューチャーセッションを学内にて行っている。

三重県、田中病院と連携協定を締結

このたび、三重県、医療法人田中病院、本学はEPA（経済連携協定）に基づく外国人看護師候補者への支援に関する連携協定を結ぶことで合意。その締結式が十一月十日、本学において執り行われた。

連携項目は次の五つ。

①外国人看護師候補者の日本語教育に関すること
②外国人看護師候補者の医療法人田中病院における実務研修に関すること
③外国人看護師候補者の看護師国家資格取得に向けた支援に関すること
④外国人看護師候補者受入施設（医療法人田中病院）の研修体制整備に関すること
⑤その他前各号の目的を達成するために必要と認められること

今後の取組みとしては、日本、ベトナムの二国間において定められた期間内に外国人看護師候補者二名が日本の看護師国家資格を取得できるよう、この三者が連携協力して支援にあたり、看護師として日本で継続的に就労できるようサポートする。

協定書を手にする（左から）田中民弥病院長・清水潔本学学長・佐々木孝治三重県医療対策局長

萼の会より スクールバスの寄贈

学生の保護者を会員として組織される「萼の会」より本学にスクールバス一台（四十人乗り）が寄贈されることになり、その贈呈式と内覧会が十月二十一日、記念講堂前広場にて執り行われた。

贈呈式では萼の会の松本真人会長が「部活の遠征等で使用していただき、今後一層の活躍を期待します」とご挨拶。松本会長から清水潔学長に大きな鍵が手渡されると出席者からは拍手が起こり、清水学長は「大切に使わせていただき、部活動の強化、学外活動の充実に努めます」と感謝の言葉を述べた。

鍵を手渡す松本会長（右）

続く内覧会では式に参列していた学生が試乗。学生たちはシートの硬さを確認したり、リクライニングを倒したりして座り心地を確かめながら、「座席が広く、長距離の移動でも疲れず快適に過ごせそう」と満足気に話していた。なお、寄贈されたバスは贈呈式の三日後に兵庫県尼崎市で開催された全日本学生柔道体重別団体優勝大会に参加するため、柔道部がさっそく使用。今後も有効に活用し、学生の育成支援につなげたい。

倉田山春秋

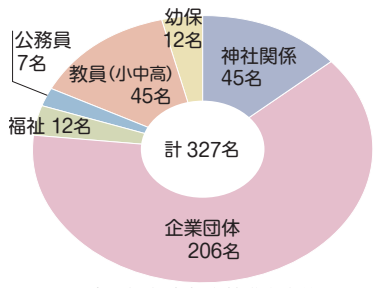
大学に念願のスクールバスが導入された▼萼の会からの寄贈によるもので、これまで不便を託っていたフィールドワーク時の移動やクラブ活動の遠征、学内行事などでの利用が期待される。学生諸君には感謝の気持ちを忘れず、大切に使ってもらいたい▼これまで使っていたバスは旧名張学舎からの引き上げ。いわゆる乗合型タイプなのは、名張駅から旧学舎までのスクールバスが必要となったからだ。通学に路線バスを利用すると混み合うという周辺住民からの懸念の声を受けての対応策だったと聞く▼通学の路線バスといえば、御幸道路を通る外宮内宮線。参拝客が主流の路線のため、日中は運行間隔の密度が高いものの、下校時には便数が大幅に減る。雨の日には満員となって乗り残しが発生したりもする。登学登校時は臨時バスも出ているが、人数をまとめにくい下校時は難しいらしい▼新スクールバスを利用者負担で運行するには営業許可や緑ナンバーの取得などハードルが高そうだが、バス会社との業務提携なら低料金で運行できそう。通学の利便性を少しでも向上させる知恵を出し合ってみてはどうだろう。

昨年同時期の八九・六%で推移

平成二十七年度 卒業予定者 就職状況中間報告

平成二十五年六月に閣議決定された「日本再興戦略」の内容を受け、経団連は倫理憲章に替わる指針を策定。今年度の採用選考活動の開始時期について広報活動解禁を卒業年度直前の三月、採用選考解禁を卒業年度の八月とし、これまでより三カ月繰り下げてのスタートとした。

平成二十七年度（平成二十八年三月卒業予定者）の学部生就職内定状況（十月三十一日現在）は、神社関係四十五名、企業団体二〇六名、福祉十二名、公務員七名、教員（小中高）四十五名、幼保十二名の計三二七名となっている。昨年同時期（三六五名）と比較すると、八九・六%で推移している。



平成27年度 学部生就職内定状況

企業・団体等 スケジュール変更でさまざまな動き

堅調な経済環境と構造的な労働力不足の問題もあり、企業の採用意欲は衰えていない状況でスタート。本学への求人件数も大幅に増加した。

また、今年度は経団連に加盟する企業を中心に採用選考活動時期の開始が三カ月繰り下がった。しかし、早い企業では解禁前の三月から選考を始めるなど前年と大差ないスケジュールで採用活動を進める企業もあり、大手企業に先んじて内々定出しに動いた中堅・中小企業も多かった。

一方、選考開始が後ろ倒しになったことから時間的余裕を感じた上、先輩たちが順調に内々定を獲得していくのを見て学生の間では楽観ムードが広がったと考えられる。実際に昨年の三年生対象の就職ガイダンス・対策講座の出席状況は、軒並み前年の二、三割減という状況であった。

今回のスケジュール変更により学生にとっては就活期間が長期化したようであるが、事前に準備を整え積極的な就職活動を行ってきた本学の学生は、順調に内定を得ている。

なお、経団連の榊原定征会長は十一月九日の記者会見で採用選考の解禁日に関し、現行の八月から二カ月程度前倒しして、来年は六月に変更する方針を明らかにした。

神職 求人数が大幅に増加

神社関係の求人状況は、十月三十一日現在で、九十五社一四五名の求人をいただいており、昨年同時期の八十社一三〇名に比べて急激に増加し、現状では昨年度の求人数を大幅に上回る状況になっている。

この求人数の増加と相まって、採用内定をいただく学生も、昨年と比べてかなり早い段階で増えており、学部生四十五名・大学院生一名・専攻科生十七名の計六十三名（昨年計五十二名）となっている（十月三十一日現在）。

ただ学生のなかには、準備不足や実力を発揮出来ないで内定見送りになる学生もおり、神職養成担当では引き続き未内定者の個別面接指導を行い、奉職希望者全員が内定を得られるよう努めていきたい。

教員 五十六名が現役合格

公立学校教員採用試験は、三重県・東京都・神奈川県・川崎市・横浜市・静岡県・浜松市・愛知県・富山県・大和高田市・大阪府・堺市・兵庫県で五十六名が現役で合格、昨年に続いて二年連続で五十名を超えた。地元三重県（小学校）においては現役合格は三十一名。既卒も含めると七十六名が合格し、三重県全体の合格者の三割という県内大学トップの占有率で、今後も教育界に大きな役割を果たすことになる。

教職支援担当では各種対策講座、個人指導の充実を図り、この実績を維持、さらに増やしたいと考えている。

生物学ゼミが名古屋市科学館で 実験講座

十月三日、四日、十七日、十八日の四日間、中松豊教育学部教授率いる生物学ゼミの学生十六名が名古屋市科学館において実験講座を行った。

「体を守る血液の役割」と題して行われた実験は、蛾の幼虫を使って血球が異物を食べる様子を観察し、体を守る血液の働きを知ってもらおうというもの。

実験に参加した教育学科四年の田中美有さんは「十五分しかない中でわかりやすく簡潔に説明するのが難しかった。話し方、伝え方ひとつで反応や理解が変わってくることを学んだので、将来、教育現場に出たときは子どもたちの反応に合わせ臨機応変に行動できる教師をめざしたい」と語った。同じく教育学科四年の松谷広志君は「顕微鏡を使うのは初めての体験だったのか、食い入るように覗き込んでいた子どもたちの姿が印象的。教員になった時には、観察や実験を多く取り入れた魅力ある授業構成にし、理科の面白さを伝えたい」と話していた。

皇學館 | 人物列伝 | 26

曽野 勝巳（その かつみ）

明治27年三重県生。大正６年東京美術学校卒業。福岡県立中学校伝習館教諭、大阪府立浪速高等学校教授、三重県立学校教諭などを経て昭和43年皇學館大学講師。
号は紫山。1894～1986。

高潔なる書家

本学園報の表題字「皇學館」は曽野勝巳の手に成る。

いずれも教育者・書家であった祖父・礫齋（れきさい）、父・恂の下に生まれ育った曽野は三重県立第一中学校（現在の津高）を卒業後、東京美術学校（現在の東京藝術大学）へ進んだ。書法を岡田濯水に学んだが、当時の美術学校では他の芸術分野についても課せられており、黒田清輝（洋画）、川合玉堂（日本画）、高村光雲（彫刻）らにも学んだという。曽野の雅号「紫山」は川合玉堂による。

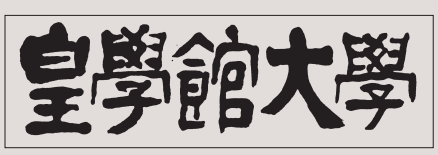
また、美術学校在学中、難関として知られた文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験（文検）習字科に合格している。

美術学校卒業後は、福岡、大阪で教鞭をとり、昭和十八年母校である三重県立津中学校（旧制）の教諭となった。戦後、津商業高等学校教諭となり、昭和三十八年から皇學館大学非常勤講師を兼任した。年譜によれば、この時期、皇學館高等学校でも教鞭をとったことが知られる。昭和四十三年から専任の皇學館大学講師となり、四十九年退任。時に齢八十であった。

曽野は自己に厳しい生き方をした高潔な人物で、どのような場合でも前に出した同じ作品を出品することはなかったという。日満書道展で大賞牌を受領して以降は全国展に出品せず、生前は個展開催、作品集刊行も固辞して自ら誇ることはしなかった。それは、俗間に自らの作品をさらすことから逃れ、清らかさを求める文人墨客の気を重んじたということであろう。

本学がロゴとして好んで用いる曽野の文字はそうした厳しさの中で書かれたものであることに思いを致せば、時代に流されて加工された「学」がいつの日か旧に復することを願わずにはいられない。

（国文学科教授　齋藤　平）



曽野の手による題字

エンヤ！の掛け声に 恵みへの感謝込め

約150名の学生が初穂曳

学生有志で構成される奉曳会メンバーは12名。この日、彼らによる木遣りの朗々とした歌声と威勢のよい掛け声がまちに響いた

十月十五日、十六日の両日、伊勢市で「初穂曳」行事が行われ、本学の学生約百五十名が参加。「エンヤ、エンヤー」と威勢のよい掛け声を秋空に響かせ、約一キロの道のりを練り歩いた。

初穂曳とは豊饒に感謝する神嘗祭を奉祝して伊勢市民が両宮にその年の初穂をお納めする行事。本学では神嘗祭奉祝委員会のご厚意により平成十九年度より一年生を中心に毎年参加させていただいている。

今年は豊受大神宮（外宮）にお納めする十五日の初穂曳におよそ百五十名が参加。鮮やかな紫色の法被を着た学生たちは「エンヤー、エンヤー」と元気のよい掛け声を上げながら、尼辻交差点から外宮までの道のりを奉曳した。道中、伊勢神宮奉仕会や北浜連合の木遣りの方の音頭で綱を上下に振ったり、左右の綱を中央に練ったりして楽しむ姿も。外宮北御門に到着後、初穂を五丈殿に奉納した学生たちは御垣内参拝をさせていただき、改めて恵みへの感謝の気持ちを捧げた。

参加した学生からは「初穂曳の綱が予想より重かった。外国人の観衆も『エンヤ！』の掛け声を楽しんでいて嬉しく思った」「初穂曳行事をまちの人たちが大切に守り継いでいることを知り、県外出身の私が伊勢の伝統行事に参加できるありがたみを実感した」「皇學館奉曳会の凛とした法被姿が格好よく、声もよく通っていた。来年は私も木遣りを歌ってみたい」といった声が寄せられた。この日に向け、伊勢神宮奉仕会のご指導のもと、木遣りの練習に励んできた皇學館奉曳会の岡崎寛英君（神道学科四年）は、「先輩の木遣り姿に憧れ入会し、この奉曳会で木遣りを三年務めてきた。その集大成として今年、大トリのどんとせ（外宮曳き込み時の木遣り）を任せられたことはかけがえのない経験であり、一生の宝」と感慨深げに語った。

なお、皇學館奉曳会は学生有志による会である。入会希望の学生は学生担当窓口まで。

皇中2年 渡邊君デザインのバス走る

ラッピングコンテストで最優秀賞

伊勢市のコミュニティバス「おかげバス」のラッピングコンテストで、皇學館中学校二年・渡邊時丸君の作品がみごと最優秀賞を受賞。おかげ犬や神宮の鳥居など、伊勢の文化に彩られたバスが十一月から伊勢市内を走り回っている。

自分の絵が描かれたバスに笑顔で乗り込む渡邊君

伊勢の文化がモチーフ

このコンテストはバスを身近に感じてもらおうと、三重交通などが参画する「伊勢地域公共交通会議」が市制十周年を記念して企画。市内の中学校六校を対象に開催した。

一三〇点の応募の中から最優秀賞に選ばれた渡邊君の作品は伊勢エビや鳥居、江戸時代に実在した飼い主の代参をする「おかげ犬」など伊勢ならではのモチーフを鮮やかな色彩と大胆な構図で仕上げたものだ。十月二十八日に三重交通伊勢営業所で開かれたお披露目式で挨拶に立った三重交通の中林広巳営業所長は「伊勢を魅力のあるところだと住民に誇りを持ってもらえるデザイン」と絶賛。渡邊君も「市民や観光客に伊勢の文化を知ってもらおうと和のデザインにした。バスを見ることで伊勢の良さを感じてもらいたい」と笑顔で話す。なお、この日は皇學館高校駐車場においてもお披露目会が実施され、集まった生徒たちは興味深げにバスに見入っていた。

お伊勢さん
ならではのデザイン

秋の叙勲

浅沼 博本学特別招聘教授が瑞宝小綬章受章

平成二十七年秋の叙勲において浅沼博本学特別招聘教授が瑞宝小綬章を受章した。

瑞宝賞は公務等に長年にわたり従事し、功績をあげた方に贈られるもの。浅沼教授は県立高校に三十八年間勤務。昭和四十一年に赴任した伊勢工業高校では野球部監督や部長を務め、同六十三年夏の甲子園初出場に導いた実績を持つ。また、茶道裏千家淡交会特別参事でもあり、本学においては日本の伝統文化である茶道を通して「おもてなしの心」をご指導いただいている。「仲間や周囲に恵まれたおかげで評価をいただいた」と浅沼教授。今後のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

伊勢で学べることに感謝

参拝見学・山室山参拝

本学恒例の参拝見学・山室山参拝が十一月五日に行われ、全学部生及び専攻科の学生、教職員が参加した。以下に学生の声を紹介する。

真新しいお宮にパワーを得て

コミュニケーション学科二年　森岡真央

滝原宮はパワースポットとして密かに注目を集めているお宮だ。

一礼して鳥居をくぐると、樹齢数百年を超える立派な杉の木立が私たちを迎えてくれた。天候に恵まれたこの日、境内の空気は澄み渡り、ピンと張り詰めているようだった。参道の玉砂利を踏みしめて歩くうち、背筋が伸びていくような気がし、パワースポットと言われる所以を感じた。また、お宮は一昨年遷宮されたばかりとあって新しい木の良い香りがし、白い木肌が輝くようであった。見た目は新しいものの遷宮という千三百年の時を経て受け継がれてきた歴史を考えるとさらに力強さを感じ、本当にパワーをもらえたような気がした。

参拝見学のような学校全体での校外学習を行っている大学は全国を探してもなかなか見つからないと思う。地域の歴史や伝統、日本に代々伝わってきた文化を知り、触れられる機会であるとともに、同じ大学で出会った多くの仲間と一緒に学べる貴重な体験だ。また、伊勢という素晴らしい気の流れる環境で学べることにも、改めて感謝したい。

各学年の参拝・見学先	
1年	山室山、斎宮歴史博物館、本居宣長記念館
2年	滝原宮、丹生神社・神宮寺（丹生大師）
3年	伊雑宮、海の博物館、金剛證寺
4年	結城神社、三重県総合博物館
専攻科	神麻続機殿神社、山室山、斎宮歴史博物館

皇學館生であることを再確認

国史学科一年　後藤亜蘭

私は今回皇學館大学でしか体験できないさまざまな経験をし、なかでも山室山参拝では本学の学問の祖である宣長と深い関わりのある場所を訪ねることができた。とくに宣長の奥墓の前で清水潔学長の献詠歌を読み上げたことはよい思い出だ。

他学科の学生とも交流を持つことができ、国史学科の学生としてではなく、皇學館大学生の一員であることを再確認できた。また、実際に見たり聞いたりすることで、座学とはひと味違った学びができたと思う。

私は静岡県出身ということもあり、三重について詳しくなかったが、この山室山参拝を通じて三重県の偉人や歴史、地域性について知った。今日得られた知見をこれからの学びに役立てていこうと思う。

墓前にて参拝の後、献詠を行う学生たち。山室山には1年生785名と専攻科27名が参拝した

スポーツキラリ

田中雄也君（教育二年）が八区を激走

全日本大学駅伝・東海学連選抜

伊勢神宮をめざし、懸命に走る田中君（写真は國學院大學提供）

第四十七回全日本大学駅伝対校選手権大会・東海学連選抜チーム選考レースが十月十日に行われ、本学の田中雄也君（教育学科二年）が八区（JA松阪から伊勢神宮内宮宇治橋前までの一九・七キロ）を走ることが決定。十一月一日に行われた第四十七回全日本大学駅伝においてその雄姿を見せつけた。この日は倉陵祭最終日ということもあり、大学正門前の沿道には応援旗を手にした学生や一般市民がずらり。走ってくる田中君の姿を認めると「がんばれ～」と力いっぱいの声援を送っていた。

薙刀・堀井小春さん（教育四年）に学長奨励賞

和歌山国体に薙刀奈良県代表メンバーとして出場し、成年女子の部で七位、少年女子と成年女子をあわせた部で四位の好成績を収めた堀井小春さん（教育学科四年）に学長奨励賞が贈られた。

学長奨励賞は、研究活動及び課外活動等で特に顕著な成績を挙げた団体又は個人に贈られるもの。堀井さんには清水潔学長から賞状と学長奨励金が授与され、今後の一層の活躍を期待するとの激励を受けた。

激励に表情を引き締める堀井さん

柔道部八名が全国大会に出場

十月三日、四日の二日間にわたり日本武道館にて行われた全日本学生柔道体重別選手権大会に本学柔道部から八名の学生が出場した。うち、二名が初戦突破、ほかは初戦敗退といずれも目標としているところには届かず非常に悔しい結果となったが、本物の強さに触れたことで勝つためには何が必要かを深く考えさせられたようだ。「臥薪嘗胆の精神で、今後も精進して参ります」と雪辱を誓う佐藤武尊監督。今後の活躍に期待したい。

高校クラブ成績

第七十回 国民体育大会出場
バドミントン部
少年男子の部　笹渕康孝　大谷啓斗
少年女子の部　谷水亜里紗　齋藤柚
男子バレーボール部　島波輝　井上雄史

第十八回 東海高校新人陸上競技選手権大会出場
陸上部
棒高跳 三位　田畑龍正

第三十五回 近畿高校総合文化祭出場
囲碁将棋部
将棋部門 個人戦　大川健太朗　瀧直哉

第五十八回 中部日本吹奏楽コンクール本大会
吹奏楽部
高校大編成の部 銅賞

第54回 倉陵祭

10/30㊎～11/1㊐

テーマ●奏（かなで）

仲間のありがたさを知る

倉陵祭実行委員長　米山裕貴

大学祭は一からすべて学生の手で創っていくもの。一人でも多くの学生に参加してもらい、それぞれの〝個性〟という音色を響かせながら調和し、倉陵祭という楽曲を奏でられたら――そうした思いから、テーマを「奏～かなで～」としました。実際、実行委員長の立場になり、痛感したのは仲間の存在のありがたさ。「今日、誰か手伝ってくれる？」と声をかけるとすぐに5、6人集まってくれたり、僕があまりの忙しさからミーティングに出られなかった時は「大丈夫か？」と気遣ってくれたり……。抜きん出たリーダーシップはないかもしれないけれど、寮や神道学科、部活で培ってきた人脈をみんなのおかげでいかんなく発揮することができました。また、今年ならではの企画として、創部以来初の全国大会出場という偉業を成し遂げた硬式野球部の試合を上映したり、神職装束の「着付体験」を「巫女体験」というネーミングに変えたりと、アイデアの詰まった倉陵祭になったと思います。

最後に、倉陵祭を通じて、これまで当たり前に思っていた友人という存在のありがたみ、大切さを改めて教えてもらいました。みんな、本当にありがとう!

祭　典

祭の成功と安全を祈願し、記念講堂にて厳かに執り行われた。祭主は本学教授、祭典を行う祭員、舞人、雅楽を奏でる伶人は学生が務めた。「『奏』という字は調和の象徴であり、一人ひとりが役割を果たし、美しい音色が地域社会に響き渡るように」との開会の言葉に続き、実行委員長の米山裕貴君（神道学科3年）が「来てもらった人に笑顔で帰ってもらえるような倉陵祭にしたい」と挨拶。倉陵祭がいよいよ始まった。

樽神輿

半世紀以上続く、倉陵祭伝統の行事「樽神輿」。今年は6基の手作りの樽神輿が本学～外宮前までを練り歩いた。これまで学科・学年ごとのみの参加だったが、今回からの試みとしてゼミや部活グループでも参加できるように。国文学科の平安文学を専攻するゼミでは十二単姿の女性をイメージした神輿、剣道部は樽の上に防具や胴着を乗せた神輿、優勝した神道学科4年有志は日本人の自然観をテーマに藁や杉の葉、流木などすべて地元から集めた自然物で制作した神輿で注目を集めていた。

講演会

昨年の7月末に初期の喉頭がんと診断され、芸能活動の休止を余儀なくされた林家木久扇氏。講演で氏は辛かったであろう闘病生活さえも面白おかしく語り、聴衆を笑いの渦に巻き込むという落語家魂あふれる講演となった。

こどもひろば

倉陵会館ではレクリエーション部による恒例の「こども広場」を開催。地域の子どもたちを対象に劇「ピノキオ」が上演され、2階では牛乳パックや紙コップを使った手作りの工作教室が開かれた。多くの親子連れが訪れ、それぞれのプログラムを楽しんでいた。

屋内ステージ

総合体育館2階では、サークルなどによる多彩なパフォーマンスが行われた。よさこい部・雅による「皇大よさこいパレード」ではステージだけでなくフロア全体を使って迫力のある演舞を披露。観客も一緒に踊れる演目を取り入れるなど、笑顔と熱気に包まれるステージを創り上げていた。

屋外ステージ

軽音楽部（JAZZ）・雅楽部・邦楽部・4教ミュージカルなどによる演奏・ダンスをはじめ、奇術部、合気道部によるパフォーマンス等、3日間にわたり個性豊かなステージで観客を楽しませた屋外ステージ。ステージ局企画ビンゴでは大勢の参加者が集まり、盛り上がった。

お茶会

お茶会では倉陵祭実行委員の茶道班が中心となって抹茶とお菓子でおもてなしをした。お菓子は、地元の菓子店・五十鈴茶屋にお願いして倉陵祭用に作ってもらったという栗饅頭をふるまった。地域のシニア、親子連れなどがたくさん訪れた。

模擬店

芝生広場や記念講堂前広場、記念講堂に続く坂道のほか、屋内に30を超える模擬店が出店。パフェやワッフル、チュロスなどのスイーツをはじめ、ちゃんこ、揚げたこ、塩焼きそばなど多彩なメニューで来場者を出迎えた。中には店員が仮装やコスプレをして祭ムードを盛り上げるブースも登場。賑やかな光景が繰り広げられた。

展　示

クラブ・同好会などの団体が各棟の教室で日頃の活動を披露。「華道部」「美術部」「陶芸同好会」などでは日頃の成果となる作品が展示され、「ビブロフィリア」「手話部」では参加型の企画で学生と来場者らが交流を深めていた。

巫女体験

巫女の衣装に憧れる女性が多いと聞いた実行委員長・米山君の発案で、倉陵祭恒例企画の「着付体験」が「巫女体験」と名称を改め登場！そのアイデアが功を奏したのか、会場となった祭式教室には大勢の女性が訪れ、巫女人気の高さをうかがわせた。

チャリティバザー

毎年恒例のバザーにも掘り出し物を求めて多くの来場者が訪れた。伊勢市社会福祉協議会との連携企画で、近隣住民に不用品を募り、売り上げは伊勢市社会福祉協議会へ寄付し、地域の福祉に役立てられるというもの。今年は3万2千円が寄付された。

ハーモニー響いた 学園祭

学園祭レポート

学園祭は学生・生徒が主体となって手掛ける一年に一度の大イベント。その過程で、学生・生徒たちはそれぞれの持ち味を発揮しながら協力し合い、〝自分たちの学園祭〟を創り上げてゆく。今年も大学・高校・中学において皇學館らしさあふれる行事が開催され、学生・生徒や保護者、地域住民で賑わった。

第53回 皇高祭

9/17㊍・18㊎

テーマ●ス・キ・ナ・イ・ロ

成功はみんなの協力があってこそ

総務副委員長　村木彩里

皇高祭の１日目の会場は伊勢市観光文化会館。吹奏楽部の演奏は去年よりもパワーアップしており、演奏の合間の部員同士の掛け合いも面白く、ずっと見ていたいと感じました。竹田恒泰氏の講演では日本の素晴らしさ、豊かさを再確認。普段気にせず生活している中でも世界に誇れる日本の知恵がたくさんあることを学びました。アトラクションではMusicals７の方々に来ていただき、プロによる迫力あふれるミュージカルに感動しました。最後の曲で生徒と一緒に踊っていただいたことは、とても貴重な思い出です。

学校を会場に開催された２日目は、個性と活気にあふれたクラス展示や模擬店、日々の成果を発表する同好会やバンドの演奏などの有志発表が皇高祭をとても盛り上げてくれました。

また、校友会の企画としてチャリティーバザーなど新しい取り組みにも挑戦しました。成功することができたのは皆さんの協力があったからこそだと思います。皇高祭で生まれた団結力をこれからの行事に活かしていきたいと思います。

祭　典

「祭典」では参列者一同が頭を垂れ、お招きした神様に本年度の文化祭の意義を申し上げるとともに、学業成就への感謝の気持ちと、その成果をご奉告。これから行われる文化祭の無事と、教職員･生徒一同が今後もますます元気で明るく勉学に励めるよう祈りを捧げた。

書道部展示

書道部では夏の校内錬成会で書き込んだ作品、掛け軸や色紙を中心に80点あまりを展示。また選択書道１年生全員の扇子も同時に展示され、雰囲気を盛り上げた。

写真部展示

写真部は普段撮影活動をしている白黒フィルムからプリントした 20 点の作品を展示した。友人や家族、学校の風景をテーマにして身近な人たちの素顔や表情をとらえた作品が多く、高校生の視点で撮影された白黒写真の魅力が来場者の心を引きつけていた。また今年は華道部と合同で展示が行われ、会場は華やいだ雰囲気に包まれた。

吹奏楽部発表

昨年に続いて三重県吹奏楽コンクール優勝を果たした吹奏楽部。「走れメロス」「情熱大陸」などポピュラーな曲の演奏に加え衣装を着替えてのダンスのパフォーマンスも披露。全員の拍手と手拍子で会場は大いに盛り上がった。

第36回 皇中祭

10/24㊏・25㊐

テーマ●162個のピースで虹を架けよう！
～煌くその一瞬を信じて～

記念行事

３年に１回の記念行事ということで、１日目にはMs.OOJAさんのステージ、２日目にはtuperatupera（ツペラツペラ）亀山達矢さんの講演が行われた。両日とも大変盛り上がり、ただ楽しむだけでなく、中学生のこれからについても考えさせられる内容だった。

みんな、ありがとう

総務副委員長　阿部七子

「第36回皇中祭の閉会を宣言します」

中学校生活最後の皇中祭の閉幕を全校生徒に告げなければいけないのに、言葉に詰まりました。それは、空き容量不足でエラーになるほど、たくさんの思い出が自分の心に溢れていたから……。

閉会宣言。校友会本部役員の仲間たちの力なくして、私にこの大役は与えられなかったでしょう。ぶつかりながらも協力して高めあった本部役員、いつでも優しく受け入れてくれたクラスメイト、本部企画を笑顔で楽しんでくれた全校生徒たち、傍で見守ってくださった先生方、そして「頑張れ」と送り出してくれた家族。みんなの力があったからこそ、皇中祭は最高のものになりました。

失敗ばかりで泣いた日もあれば、みんなで笑い合った日もありました。本部役員として、皇中祭実行委員として、この皇中祭に関わることができたこの思い出は、自分の人生の中で一番の宝物です。

162人全員で虹のように美しく輝く「小説」を書き上げることができました。その最後のページに書かれた言葉を伝えます。

「みんな、ありがとう」

クラス展示

優勝は２年Ｂ組の『Music class 2B』。ICTを用いて音楽の歴史や、楽器の体験、イントロクイズを行う新しい形の展示であった。他にもトリックアートや平安時代の貴族の風俗の展示など、どのクラスも工夫を凝らしたものばかりだった。

合唱コンクール

優勝クラスは３年Ｂ組。クラス全員の心を一つに課題曲「青葉の歌」と自由曲「STORY」を歌い上げ、素晴らしいハーモニーを会場に響かせた。

皇中祭実行委員

第36回皇中祭を企画・運営するために、校友会本部役員を中心に庶務委員、各クラス代表者で結成された25名の実行委員。花壇アートやパンフレット作成を始め運営全てに携わり、最高の皇中祭を作り上げた。

B・R・B（ブック・レビュー・バトル）

今年度から新たに始まったB･R･B。朝スタで読んだ本の書評を３分間でジェスチャーを交え、各クラス代表者が発表した。いずれも本が読みたくなる素晴らしい発表ばかりだった。初年度の優勝は３年Ａ組代表の松田ひな子さん。

花販売・赤い羽根募金

２階のサンラウンジでは花販売、赤い羽根共同募金活動が行われた。赤い羽根募金は伊勢市社会福祉協議会へ、花販売の利益は未だに復興が続いている岩手県・宮城県・福島県・茨城県に東日本大震災義援金として寄付された。

皇高 NEWS

昨年度を上回る参加者

平成二十七年度 オープンスクール総括

三回実施された本年度オープンスクールはすべて無事に終了した。

八月二日に行われた第一回は昨年度に引き続き「皇學館中学校・高等学校合同オープンスクール」として開催したところ、昨年度とほぼ同数の一四〇〇名（うち高校参加者は一二四〇名）が参加し、盛会のうちに幕を閉じた。続いて十月四日に実施した第二回オープンスクールには三六〇名が来場。第一回、第二回の合計が一六〇〇名と、過去最高の参加者であった昨年度をすでに二回目で上回ったことになる。また、今年度の最終回となる第三回オープンスクール（十一月二十二日実施）にも多くの方に足をお運びいただき、教職員一同、身の引き締まる思いである。

平成二十八年度も多くの中学生の受験、そして入学を期待したい。

記念講堂の全体会の一コマ

〝学校の顔〟を自覚

北海道へ三泊四日の修学旅行

十月七日から三泊四日の日程で北海道への修学旅行が行われた。今回は台風の影響で急きょコースを変更するハプニングもあったが、生徒たちにとっては一層記憶に残る旅となったようだ。また、現地の方に礼儀正しい振る舞いを褒められた体験から、公共の場では自身が〝学校の顔〟となることを自覚した生徒も多く見られた。以下に生徒の感想を掲載する。

美幌峠で記念撮影

マナーを褒められ嬉しかった

二年三組　尾崎　ななみ

待ちに待った北海道。台風接近によって予定を変更せざるを得なくなったが、そんな中で私たちが楽しむことができたのは先生方、現地の方々のおかげだと思う。私たちのマナーについて、現地の方々にお褒めの言葉をいただけたのも嬉しかった。また、仲間との信頼関係が深まり、得られたこともたくさんあったので、本当に思い出に残る修学旅行となった。

日頃のご指導のおかげと感謝

二年九組　深田澪央

期待に胸を膨らませて伊勢を出発し、北海道に到着した。初日は美幌峠の美しい景色を満喫したが、二日目は思いもよらぬ台風の襲来によって、残念ながら北方領土望見が頓挫してしまった。けれども三日目の小樽散策や四日目の北海道神宮参拝などは予定通りで、しっかりと研修することができた。また、行く先々で行動を褒められることが多く、ひとえに先生方のご指導のおかげと感謝している。修学旅行で学んだことを今後に活かしていきたいと思う。

団結力の強さ感じた体育大会

九月二十九日に開催された今年の体育大会は、晴天に恵まれとても気持ちのよいものだった。十色のTシャツを身に着けた千百名を超す生徒が真っすぐに並んだ光景はとても壮観で、今でも鮮明に覚えている。

この体育祭でとくに私の印象に残っていることが二つある。一つは、あるクラスのリレー出場選手がバトンを落としてしまった時、その生徒のクラスメイトがすぐに駆け寄って「大丈夫」と励ましていたこと。一つでも上の順位をめざしてみんなが頑張っている中で、ミスをしてしまった生徒にそんな言葉がかけられるだろうか。その言葉の中にクラスの絆の深さを感じることができた。もう一つは、リレーで周回遅れになりそうだったクラスの誰一人、力を抜いて走っている生徒がいなかったことだ。最後まで頑張ろうとする一生懸命で直向きな姿に心を打たれた。

この体育大会を通して今まで以上にクラス、学年の団結力は強まったに違いない。この体育大会の成果が今後の高校生活に活かされていくことを期待したい。

総務委員長　小林聖也

秋晴れの中で行われた体育大会

47回目を迎えた父母の日の行事

今年で四十七回目を迎える「父母の日」の行事が十月三十日、皇學館高校・中学校で行われた。これは、教育勅語にある「父母ニ孝ニ」の一節にちなんで勅語渙発の十月三十日を「父母の日」と定め、私たちを育んでくれた両親、先祖への感謝の気持ちを綴り、教育勅語を謹書するというもの。謹書は全員分を製本後、明治神宮に奉納される。

「父母の日に思う」との題でこの日までに生徒が書いた作文のうち、皇學館高校では佳作以上の優秀作品を文集にまとめている。審査の結果、今回の最優秀賞は下村明里さん（一年十組）、優秀賞は津本楓さん（三年八組）、同じく優秀賞は中野恵理香さん（二年七組）の作品となった。最優秀賞となった下村さんの作品は、母親の「いのちの授業」というボランティア活動を手伝う中で、今までわからなかった母親の自分への「愛」に気づき、今後はその受けた「愛」の分だけ両親に恩返しをしたいという内容だ。

皇學館中学校の竜川さわなさん（三年B組）は「父も母も厳しい時は本当に厳しいが、すべては愛情からということが、作文を書いたことで改めて感じた」と語り、「毎日の生活の中では照れもあり素直に『ありがとう』と言えないが、今日この日は感謝の言葉を口にして、心を込めて伝えたい」と家族への感謝の気持ちを改めて思い起こしていた。

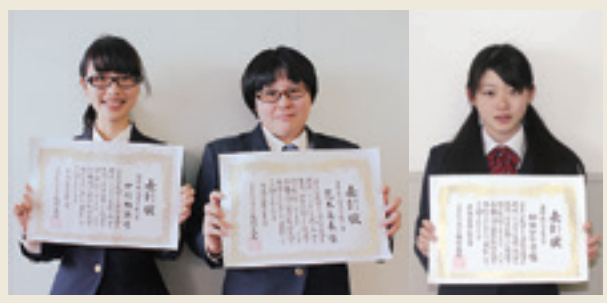
真剣な表情で謹書する生徒たち

校友会の三名に優良生徒賞

第五十一回三重県私学大会

十月三日、津市の三重県総合文化センターにおいて第五十一回三重県私学大会が開催され、皇學館高校三年の中川初保さん（前校友会総務副委員長）と荒木美来さん（前校友会総務副委員長）、皇學館中学校三年の松田ひな子さん（校友会総務委員長）の三名が優良生徒として表彰を受けた。

中川さんは「この賞は自分一人の力でいただいたものではなく、共に活動してくれた校友会の仲間、生徒の皆さん、そして私たちを暖かく見守り、励ましてくれた先生方のおかげ」と話し、荒木さんは「受賞をとても光栄に思う。これを新たな契機としてこれからも日々精進していきたい」と喜びを語った。松田さんは「私が総務委員長をめざしたきっかけは、同じくこの賞を受賞し、総務委員長であった先輩の存在があったから。今回、私も賞をいただけて本当に嬉しい。それと同時に、身の引き締まる思い」と熱い思いを語った。校友会役員としてよりよい学校生活や行事運営をめざし奮闘している三人。今後の成長が楽しみだ。


受賞を喜ぶ３人。左から、中川さん、荒木さん、松田さん

皇中 NEWS

のべ約二百組が参加

皇學館中学校オープンスクール二〇一五

本校では今年度三回の全日程を終了した。中高合同開催となった八月の第一回「皇學館を楽しもう」では、中学合唱部、高校吹奏楽部の発表、体験授業、部活体験など多くの小学生の参加があった。制服体験やかき氷などのフリーフードコーナーもあり、皇學館を十分楽しんでもらうことができた。九月の第二回「皇學館を知ろう」では在校する六年制生徒をパネラーに迎え、皇學館についての魅力を大いに語ってもらうことができた。入試が近づいてきた十一月の第三回「皇學館で学ぼう」では学校説明、入試出願説明のほか、本校教員による入試対策学習会が開催され、緊張が張り詰める中、集中して学習する小学生の姿があった。また、小学三年生から五年生の児童を対象に、合科型授業〝皇學館で「考・学・感」〟が行われ、アクティブラーニング、タブレットPCを使用したICT教育の実際を体感してもらうことができた。

関係各位の協力を得て、三回あわせて約二百組の参加をいただき、今年度も盛大にオープンスクールを開催することができた。今後も本校教育を多くの方に理解していただけるよう努力していきたい。

第１回オープンスクール　パスカルの原理の応用とチリメンモンスターを探そう（理科の体験授業）の様子

中高生徒が清掃ボランティア

十月十二日に皇學館中学校の皇中祭実行委員二十五名が、同月二十三日に皇學館高校有志生徒一一七名がボランティアで清掃活動を行った。

皇中祭実行委員による清掃は神宮を流れる五十鈴川をより綺麗にして地域に貢献したいという校友会本部役員の強い思いから企画されたもの。起点となる三重県総合体育館を出発した参加者は四つのグループに分かれ、川原や道沿いのごみ拾いを協力して行った。また、五十鈴川の水生生物を採取しての水質調査も実施。中心となった二年B組江藤朋華さん(会計)は「ごみが少なく、水質調査では水質階級Ⅰに生息するカワムツが多くてとても綺麗な川であることが実感できた。地域や訪れる方々の五十鈴川を大切に思う気持ちが伝わってきて、川の自然を身近に感じた」と話した。

快晴の中行われた皇學館高校の清掃活動。お弁当の空容器やタバコの吸い殻が多かったとのことだった

皇學館高校の有志生徒はいくつかのグループに分かれ、伊勢総合病院周辺、五十鈴川駅周辺、伊勢球場周辺等を一時間ほど清掃。二年七組の島田めぐさん(総務副委員長)は「たくさんの生徒が集まってくれたのが嬉しかった」と話しつつ、「捨てられたごみは結局地域の人たちが始末しなければいけなくなる。根本的に解決するには捨てていない人が拾うという構図ではなく、そもそもごみを捨ててはいけないという公共心や道徳心を一人ひとりが一層強く持つことが大切だと思う」と感想を話していた。

昨年度と違い、天候に恵まれた今年度。この活動を通して皇中祭実行委員のメンバーは「絆が一層深まった」と話す

防災意識を啓発

煙の中を避難する訓練

大学◆避難訓練

十月二十二日、Ⅳ講時終了後、学生・教職員を対象に避難訓練が行われた。地震発生に伴い、火災が発生した想定でアナウンスが流れると、学生や教職員は一斉に避難場所である第一グラウンドへと避難した。

避難終了後、二グループに分かれて水消火器訓練と煙発生器訓練を実施した。水消火器訓練は水消火器の使い方を説明した後、十数名の学生が水消火器を体験。煙発生器訓練は建物などで火災が起き、煙が充満した場所を避難する場面を想定して訓練を行った。

水消火器を体験した学生は「実際に火事が発生した場面を想定して訓練ができ、良い経験になった。消火器は想定していたよりも重く、持つのが大変だった」と話し、煙発生器訓練を体験した学生は「煙が発生すると目の前が真っ白。何も見えない中、体勢を低くして避難するのは大変だった」と感想を話した。

中学◆防災講話

十月二十八日、皇學館中学校卒業生の竹之内健介氏を講師としてお招きし、全校生徒を対象にセミナーホールで防災講話をしていただいた。

七人程度の縦割り班になって講話に臨んだ生徒たち。事前学習を兼ね、三年生が具体的な災害事例を基に作成した問題が出題されると、同じ班の一、二年生がとるべき適切な対応を回答。最初から正しい答えを教えてもらうのではなく、まず考える時間を与えられたことで、より実践的、主体的な姿勢で取り組めたようだ。

災害時に大切なのは、情報そのものよりも、時として断片的な情報を、各自が置かれた状況といかに結び合わせて活かせるかにある。竹之内氏はその重要性を強調された。今回の講話から、災害時の具体的な対応のあり方について多くを学んだ。

県内中学二校から計八十名が来学

九月二十九日、十月十六日と相次いで中学生が大学見学に訪れた。

九月に来学したのは松阪市立大江中学校の生徒二十八名。同中学の皆さんは七二二教室で簡単な大学紹介の話を聞いた後、コミュニケーション学科の川島一晃助教による「傾聴ワークショップ」を体験。一人が台本を読み、もう一人がそれに対し相づちを打つというペアワークを行った。生徒たちは「相づちの難しさを感じた」「同じ『へえー』という言葉でも言い方によってとらえ方が違う」などと口口に感想を話していた。

模擬講義を楽しむ生徒たち

また十月には大台町立大台中学校三年生の生徒五十二名が来学。同中学校の皆さんはコミュニケーション学科の芳賀康朗教授による模擬講義「心の不思議を体験しよう!」を受講。トリックアートや左右上下が逆に見える特殊なメガネを使った実験に興味深げに取り組んでいた。

両校とも体験授業の後は研究室、図書館、総合体育館、芝生広場などを見学し、学生食堂でのランチ体験へ。お目当てのメニューを食べ、味やボリュームに満足した様子だった。

後日、大学に寄せられた大江中学校の皆さんからの感想には「ランチがおいしかった」「学生の方が明るく挨拶をしてくれ嬉しかった」「キャンパスが広かった」といった素朴なものから、「心理学に興味が湧いた」「模擬授業がとても楽しく、大学生になったらこんな講義が受けられるのだとワクワクした」「高校は通過点に過ぎず、その先の大学や就職のことを含めて進路を考える必要があると思った」など将来を見据えた声もあり、本学の魅力を大いに感じ取っていただけたようだ。

初めての学食体験にどきどき

第16回 高校生英語スピーチコンテストを開催

初出場の野上さんが優勝

入賞者にはそれぞれ表彰状と盾、副賞の図書カードなどが贈呈された

本学コミュニケーション学科では、十月二十五日、第十六回高校生英語スピーチコンテストを開催した。

同コンテストには県内十九校から四十一名が出場。緊張感が高まる中、参加者はあらかじめ提出したテーマ、原稿により約三分間のスピーチを行った。中にはポスター等の小道具を使用したり、身振り手振りをつけたりと工夫を凝らしたスピーチも。終了後はどの参加者も一様にほっとした顔つきになり、席に戻った。

同学科の教員ら三名(うち二名は外国人教員)による厳正な審査の結果、「The Valentine's Day Gift」と題するスピーチを行った野上夏香さんが優勝。野上さんは「コンテストへの出場は初めてでとても緊張したが、いざ演壇に立つと楽しみながらスピーチすることができた。部活が忙しくあまり練習ができなかったが、家や学校でこまめに時間を作りALTの先生とともに練習に励んだ。将来は積極的に英語を使い国際的な仕事がしたい」と語ってくれた。上位入賞者は次の通り。

第一位	野上夏香さん	(名張西高等学校2年)
第二位	木内彩乃さん	(高田高等学校1年)
第三位	笹山祐紀子さん	(伊勢高等学校2年)

教職員人事

〔〕内は旧職

昇格　平成27年9月1日付
研究開発推進センター助教
佐野　真人
〔研究開発推進センター助手〕

採用　平成27年9月18日付
文学部助教　小堀　洋平

〈出身地・経歴等〉
埼玉県出身。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了。前早稲田大学文学学術院次席研究員(研究院講師)
〈一言メッセージ〉
日本近代文学の多様な魅力を、学生の皆さんに伝えられるように努めます。

採用　平成27年9月19日付
事務局総務部事務嘱託
西井　みのり

〈出身地・経歴等〉
三重県出身
〈一言メッセージ〉
初心を忘れずに、一生懸命頑張ります。よろしくお願いいたします。

採用　平成27年10月1日付
学生支援部就職マッチングコーディネーター(事務嘱託)
田間　敏明

〈出身地・経歴等〉
三重県出身。日本大学経済学部卒。前第三銀行職員
〈一言メッセージ〉
新しい環境での仕事にわくわく感を抱きつつ、就職活動に役立つアドバイスを行っていきたいと思います。

退職　平成27年10月9日付
事務局財務部事務嘱託
後藤　一美

イベント情報（12～2月）

12月

26 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
神道と仏教―神社仏閣に見る神仏習合と神仏分離―
「日光における神仏習合と神仏分離」
河野　訓（文学部教授）

1月

9 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
『古事記』を読む（上巻）
「大国主神の国造り～スセリ姫の嫉妬」
白山芳太郎（文学部教授）

23 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
神道と仏教―神社仏閣に見る神仏習合と神仏分離―
「籠神社と成相寺における神仏習合と神仏分離」
河野　訓（文学部教授）

2月

6 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
1日・短期講習会　原文で読む『日本書紀』神代巻
―月夜見尊（つくよみのみこと）と保食神（うけもちのかみ）―　松本　丘（文学部教授）

20 土 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
『古事記』を読む（上巻）
「タギリ姫～スクナヒコナとの共治」
白山芳太郎（文学部教授）

◉各講座の詳細につきましては、**本学ホームページ**にてご確認ください。
◉**共催講座**（近鉄文化サロン阿倍野）のみ、**有料**です。お問い合わせは**近鉄文化サロン阿倍野**（☎0120-106-718）へお願い致します。
◉その他お問い合わせは、**皇學館大学地域連携推進室**（☎0596-22-8635）へお願い致します。

編集後記

学園祭が今年も成功裏に終わりました。厳粛な祭典神事で始まることからわかるように、本学園の文化祭は単なるイベント、お祭騒ぎではありません。学生・生徒たちが主体となって企画する行事は「建学の精神」に基づく日頃の教育活動の成果・表れであり、また、仲間と心がつながる喜び、力を合わせる楽しさ、調和の大切さを学ぶ教育の場でもあります。この良き伝統がいつまでも受け継がれていくことを願います。【企画部】

英国・ケント大学 夏期英語研修報告

皇學館らしさを発揮

八月三日から三十一日までの二十九日間、英国・ケント大学夏期英語研修が実施され、十八名の学生が参加した。以下に今回初めて学生を引率したコミュニケーション学科のメイヨー・クリストファー准教授の報告と学生たちのインタビューを紹介する。

英語力に主体性、そして友情 目覚ましく成長した学生たち

コミュニケーション学科准教授　メイヨー・クリストファー

【8月20日】貴婦人の城・リーズキャッスルへの小旅行

「目的地というのは実際にある場所のことではなく、新しいモノの見方のことである」。これは「グローバル人材」を理解するためのよい言い回しである。外国語を学ぶということは新しい語を学ぶだけではない。未知の考え方に出会うことで人として成長し、世界を新しい視点で視るためでもある。また自分の文化を分かち合うことで人々の視野を広げる助けとなる。

今年八月、十八名の本学学生がイギリス、カンタベリーにあるケント大学で約一カ月間の夏期英語研修に参加した。カンタベリーという街は非常に伊勢に似ている。どちらも何百年にもわたって人々が巡礼で訪れた聖なる地であり、また大学から徒歩圏内の比較的狭い場所に、古いものと新しいものが融合した独特な伝統を継承している。このような環境で学生は毎日、英語の特別集中授業を受け、熱心に課題に取り組んだ。

もちろん勉強一辺倒ではない。早朝に、私は有志の学生たちとランニングに出かけ、美しい自然や古い町並みの中を走り抜けた。午後に授業が終わると、街中至るところにある史跡を見学したり、夜には地元の料理を試したりした。治安も良く、安心して街の散策を楽しんだ。

私は参加者たちの英語力が飛躍的に伸びるのを目の当たりにした。日本文化を紹介する“Taste of Japan”では、ケント大学の学生やスタッフが多く訪れ、活発な英語でのやりとりが随所で見受けられた。英語力だけではなく、まさに人生が変わるような経験をした学生もいたようである。最初は内気だった学生が人前で踊ったり歌ったりするようになったことや、最後のロンドン観光では独自に課題を課すなど主体性のある行動をとるようになったことなど、目覚ましい成長ぶりが見られた。また、参加者の間に培われた友情は大きな副産物であろう。今回の参加者たちが蒔いた種がカンタベリーの地で実となり、将来、人々が皇學館大学や伊勢に興味を持つような交流へと繋がっていくことを切に願っている。

参加者インタビュー「語学力に加え積極性も身に付いた」

今回は山本哲也君（国史学科二年）、浜口英子さん（教育学科二年）の二名に、研修に参加した感想を語ってもらった。

―参加しようと思った理由を教えてください。

山本◆これから社会に出るにあたり、さまざまな経験を積んでおきたい、また、自分の英語力がどこまで通じるのか試してみたくて参加しました。

浜口◆語学力を上げ、視野を広げられたらと思い、参加を決めました。

―日本の授業と比べ、どのような違いがありましたか？

山本◆学生と教員が積極的に意見を交換し、互いに学び合う姿勢が印象的でした。

浜口◆ゲーム形式を取り入れるなど、参加型の授業が多かったと思います。

山本哲也君

―どの授業がいちばん大変でしたか？

山本◆最終日に行われたプレゼンテーションの準備が大変でした。原稿を何度も書き直したり、キャンパス内外の人にアンケート調査をしたり、プリンター機器の不具合を寮の方に伝えたり……。しかし、この経験のおかげで度胸がつきました。

浜口◆どの授業も切り口が新鮮で、いろいろな発見がありました。

【8月11日】世界遺産・カンタベリー大聖堂でのフィールドスタディ

―研修中、印象に残ったことはありますか？

浜口◆日本と比べアルバイトをしている人が少なく、家族と過ごす時間をとても大事にしていると知り、驚きました。また、建物のデザインが統一されていて町並みが綺麗だったことも印象深いです。

山本◆外国人が日本料理店などでごく当たり前にお箸を使っている光景に驚きました。また、ヨーロッパにはアイスコーヒーという文化がないので、ハンバーガーショップの店員さんに説明するのが難しかったです。

―参加前に比べ、成長したと思うことは何ですか。

山本◆語学力については、参加する前は自分の考えが伝えられない、文章が思いつかない、単語が出てこないという状態でしたが、参加後は訛りまでわかるようになり、アルバイト先では外国人のお客様への接客を任されるようになりました。とにかく話さないと英語の勉強になりませんし必要な情報が得られなかったので、積極性も同時に身に付いたと思います。

【8月19日】日本文化発信行事「Taste of Japan」

浜口英子さん

浜口◆私も英語を聞き取る力に加え、決断力や積極性が増したと思います。

―語学力を上げるにはどのような勉強法が有効だと思いますか。

山本◆どのような形であれ、ニュースなど生きた英語をとにかく聞くこと。話者の後から同じように話していくシャドウイングも効果的だと思います。

浜口◆自分の持ちうる単語を駆使して、会話をすることが大事だと思います。

―同研修への参加を検討している学生に対して、メッセージをお願いします。

浜口◆参加したことで他の国にも行ってみたいと思うようになりました。異文化に触れることはとても刺激的で面白いことがたくさんあるので、ぜひ参加してください。

山本◆外国人と話をすることにまったく抵抗を感じなくなり、もっと話したいという意欲さえ湧いてきたほど有意義な一カ月でした。参加して損することは何一つありません。人生経験としてプラスになることばかりなので、興味があったらぜひ参加してみることをおすすめします。

【8月25日】研修成果発表会

皇學館ミュージアム

役者絵　市川団蔵（高師直　大星由良之助）

江戸時代　一枚　法量　縦38.6糎　横26.0糎

江戸庶民の心とらえた風俗画

五渡亭国貞（三代目豊国）が描く市川団蔵の役者絵です。演じている演目は「仮名手本忠臣蔵」です。忠臣蔵は、元禄十五（一七〇二）年十二月十五日未明、大石良雄ら四十七士が主君の敵、吉良義央を殺害した事件に題材をとり、舞台を室町時代に移し演ずるもので、現在でも評判の高い演目の一つです。善の大星由良之助、悪（敵）の高師直の一人二役を描きます。団蔵は多様な役柄をこなし、音曲をも得意とした名優です。渋団蔵とも呼ばれています。

（伊勢　千束屋資料のうち）

研究開発推進センター
佐川記念神道博物館
学芸員・教授　岡田芳幸